

2001年から4年間、日本ロシア文学会の会長を務められた川端香男里先生が、本年2月3日に87歳で逝去された。川端先生は英文学者、山本政喜の三男で、結婚により川端姓に変わられたが、その経緯は既に知られており、先生ご自身の回想にも時々登場しているため、改めての紹介は省かせて頂く。ここでは研究者としての川端先生のお仕事とお人柄を偲び、心からの感謝を捧げて、悲報を乗り越える契機としたい。

川端先生の大学教員としてのお仕事は1963年に北海道大学で始まり、1969年には東京大学教養学部に移られて、木村彰一、北垣信行、米川哲夫、吉上昭三、佐藤純一、直野敦、菊地昌典等、錚々たる顔ぶれの先生方とともに教育指導に当たられた。その後1973年に文学部に異動され、木村彰一先生とともに露語露文学専修課程の設立に、また木村先生ご退職の後には栗原成郎先生とともにその運営に尽力され、長年に亘り東大のロシア学を支えられた。基本図書揃え、教養学部の先生方に加えて、新谷敬三郎、原卓也、江川卓、藤沼貴、中村喜和等、日本を代表するロシア研究者達に非常勤講師として来て頂き、学生を恵まれた学問環境におくことに努められた。1980年から退職時までは文学部の西洋近代語近代文学専修課程の主任も兼務し、専門科目を週十コマ以上、担当されたこともある。1994年定年退職後は中部大学、川村学園女子大学で教鞭をとられ、後者では一時期副学長の任にあった。ロシア文学会以外にもロシア・東欧学会、トルストイ協会等、学協会の長を数多く務められている。私自身は東京大学の教養学科ロシア分科在籍時に授業を受けたのが先生との最初の出会いだが、先生も教養学科の出身で、手許にある古びた卒業生名簿には「1956年卒業フランスの文化と社会（第4期生）」の欄に川端（山本）香男里と記されている。その後、私は本郷キャンパスの大学院で本格的に指導を受けることになり、この学部大学院あわせでの学生時代と、スラヴ（露文から改称）研究室で助手として勤務していた期間と、先生と入れ替わりに文学部助教授として採用されて後、研究会等、より自由な環境で先生に接した日々の、3つの時期の思い出が心に残っている。

川端先生のお仕事は誰もが認めるように極めて幅広い分野に亘っていた。パリ大学、モスクワ大学他、様々な文化圏で学ばれた経験はあったにしても、それは単に多言語に通じているということではなく（若い頃の川端先生を知るフランス思想の専門家で、先生よりひと月ほど前に他界した宇波彰氏の「川端香男里氏は26カ国の言語をあやつるという話しだった」という文章を読んだことがあるが、26カ国の内訳については確かめそこねてしまった）、また学際とか比較という安易な概念で表現されるものでもなく、ものの見方が自由であると同時に客観的でバランスがとれていた。浩瀚な知識がお仕事に顕れていたが、単なる教養主義ではなく、かといってプロフェッショナルイズムの硬直もなく、人文学に対するそのしなやかなスタンスは学生にとって学ぶところが多かったのである。英文学者であった御実父の影響や実妹の美術史研究者、若桑みどり氏との交流の中で育まれた文化的環境が先生の背景にあったのだろう。

最近の文学研究は、よい点でもあろうが、専門的に究めることを優先し、細部での失点を恐れる傾向にあるのに比して、半世紀ほど前は何よりもパイオニアの情熱が研究者を駆り

立てていたように思う。川端先生はそうした巨人達の最後の世代のおひとりとも言え、未踏の分野を次々精力的に開拓されていった。フォルマリズム、バフチン、ベールイの紹介と評価を手がけ、20世紀だけでなく、18世紀や中世にも取り組まれた。私の経験ではあるが、これほど幅広い対象に向けられた情熱は少なくとも間近で見たことがない。もともとはフランス文学専攻だが、ディドロで卒論を書かれたのだから、文学にとどまらず、美学、思想、社会に興味をもたれていたのだろう。また、先生自身が、本当にやりたかったのは「中学生以来愛読していたというか、耽溺していたロシア文学です」と回想しておられるように、テーマは「ロシアにおけるディドロ」であった。晴れて、東大大学院（比較文学）ではロシア研究を本格化され、レールモンツフに関する修士論文を作成された。19世紀全般に造詣が深く、プーシキンやチュッチェフを評価され、ドストエフスキーを翻訳され、トルストイ論も上梓しておられる。扱われた対象はどれほど挙げても尽きることがなく、遺漏については予めお詫びするしかない。『ユートピアの幻想』（潮出版社）や『薔薇と十字架』（青土社）等、お仕事はいずれも啓発的だったが、私は自身の研究分野に関わるものとして、個人著の『ロシア文学史』（岩波全書）とR.ヒングリー『19世紀ロシアの作家と社会』（平凡社）の翻訳を繰り返し読んだ。先生の開拓された分野は教え子達がひとつひとつ継承した。とても継承というレベルではないが、私自身はドストエフスキーの初期についての研究から出発したのが、18世紀に対する先生の知見に刺激されてこの時代に踏み込むことになった。

川端先生は所属大学の内と外とを問わず、優秀な後継者をたくさん育てられたが、一度として指導者としての立場を誇示されたことはない。先進的で偏見を嫌い、女性を研究室助手に起用したのは、殆ど女性のいなかった当時の東大文学部では異例の出来事であった。学閥も性差も超えたところでお仕事をされ、群れるのはお好きでなかったように思う。実は過激な一面もあって、若い頃は相当論争的だったと聞いていたので、いつだったかその点を確認することがあった。「そうだね、でも学生に迷惑をかけるわけにはいかないから、今はもう（喧嘩を?... 金沢）やめてるよ」と笑ってらした。

その他いろいろ思い出は多い。クリスマスにチキンを料理してお母様に届けておられたこと、ご息子が自分にそっくりだと喜んでらしたこと、自家製のパンを種蒔きから始め、収穫して完成品を研究室で振る舞われたこと、妙な物の蒐集家（ご自分でも認めておられた）で色とりどりの図書館カードを持っておられたこと、届いた洋書を先生が開く前に学生が借りてしまったこと、スラヴ研究室で同僚だった栗原成郎先生と肩を並べて職場から「下校」されていたこと... また特記すべきことでないかもしれないが、「ロシア書に登場する外国の固有名詞には注意するように。フランス語、ドイツ語、ラテン語等、もとの名を表記できないのは恥ずかしいことです」という教えも耳に残っている。検索エンジンが普及し、ネット上で容易に原語に辿り着ける現在ではあるが、陥りそうな落とし穴はまだ至る所に存在する。先生の教えを受けた者なら、今なお細心の注意を払っているのではないだろうか。ロシアはヨーロッパであり、アジアであり、世界であることを強調され、文学研究者の独善を窘めようとされたのであろう。

川端先生は1994年3月の東京大学最終講義で18世紀について話され、改めてこの時代への関心を示された。それだけに10年後、2003年7月の18世紀ロシア研究会発足時の風景は先生との共同作業の鮮明な記憶として残っている。先生は出発点であった18世紀研究に戻ってこられた、とその時ふと思ったのだ。